



320人におよぶ参加者を迎えて行われた日本支部総会・大会。

## 第2回健康都市連合日本支部総会・大会開催 モデルプロジェクト 「ヘルシースクール」も進行中



「ぼく好き嫌いなよ!」「牛乳にはカルシウムが入ってるんだよ」人形のバッチくんの問いかけに、元気な声が響く教室。楽しい食育の時間です。



市川市は、WHO（世界保健機関）が推進する健康都市プログラムに積極的に取り組んでいます。WHO西太平洋地域事務所が提唱し設立された健康都市連合に加盟しており、その日本支部長市として昨年に続き、第2回日本支部総会・大会を和洋女子大学で開催し、国内の23市が参加しました。

こうした健康都市推進のモデルプロジェクトの一つが、市内全64の幼稚園や小学校で健康教育を行う「ヘルシースクール」。ある朝、八幡小学校3年生の教室では、栄養士による腹話術の朝食指導が行われていました。ともすれば偏った食生活になりがちな飽食の時代、健康な食を選ぶ力を子どもの頃から身に付ける取り組みが進んでいます。



市川南自治会のトップページ。内容はこれからますます充実していく予定です。市川市電子自治会  
<http://www.ichikawa-jichikai.jp/index.html>



市川南自治会のホームページ制作に携わるメンバー。左から馬場達二会長、坂本道子さん、佐々木和夫さん、峰義幸さん。

## 市川が世界の情報化都市トップ7に 「電子自治会」など新事業も 続々登場

近年、市では電子行政サービスの充実や携帯電話を使った防犯情報の提供など、地域情報化に向けた数々の取り組みを行っています。その成果が世界レポート連合（WTA）に評価され、2006年の「インターネットコムユニティトップ7」として表彰を受けました。これは毎年地域の情報化に取り組み世界の都市の中から特に優れた7都市に贈られている賞です。

昨年からは、市民一人ひとりと自治会をITでつなぐ新たな試みとして電子自治会事業を始めています。これは、市が提供するウェブサイトに各自治会がホームページを作り、コミュニケーションや情報発信の場として活用してもらうというものです。昨年4月にホームページを開設した市川南自治会では、会員の方からホームページを見ての問い合わせや行事の写真を欲しいという要望などの反響があったそうです。掲示板、掲示板に次ぐ新たなツールとして、あなたもインターネットで近所づきあいをパワーアップしてみませんか。



受賞を喜ぶ市川市代表団。他の受賞都市は、1位の台北市（台湾）をはじめ、江南区（韓国）、天津市（中国）、クリーブランド（米国）、マンチェスター（英国）、ウォータールー（カナダ）の6都市。

## City Voice創刊20周年 創刊号から最新号までを一挙大公開

市民と市を結ぶグラフィック誌として発行されてきたシティ・ボイスは、1986年の創刊から今年で20年を迎えました。この機会に改めて創刊号から最新号までの全34冊を見ると、その時代の空気や市の施策の流れをつぶさに感じ取ることができます。

創刊当初の表紙は丸みを帯びたロゴに、写真やイラストが盛りだくさん。誌面に取り上げられている施策も都市基盤や大型公共施設の整備など、好成長を遂げる日本経済を背景にハード面の充実が図られてきたことがわかります。今見ると、ちよつと昔っぽさが漂うデザインもかえって新鮮です。

80年代の終わり頃になると社会の成熟にもなつて、より洗練されたものが求められるように。表紙は徐々にシンプルになっていきます。特集の内容も、市川の文化や歴史、自然などを取り上げる企画が目立ち、まっすぐりはソフト面の充実を目指す時代に。

このようにして現在に至るまで、シティ・ボイスが発行され続けてきたのは、それだけ市川が話題に事欠かないまちであり続けたこととの証明とは言えないでしょうか。古くは縄文の人々が暮らし、奈良時代には下総国の国府として栄え、中世には日蓮が法華経寺を拠点とし、江戸時代には塩の一大産地として潤い、近代では多くの文人たちに愛されたまち、市川。先人たちが残した歴史という財産を受け継いで、現代の市民が新しい市川文化を築いていく限り、これからもシティ・ボイスはその様子を記録し、伝え続けていきます。

※シティ・ボイスのバックナンバーは、中央図書館で閲覧することができます。



No.1 1986年1月発行  
記念すべき第1号は、総合治水計画を取り上げた特集「わがままな川から我が真間川へ」。表紙のレオタード姿の女性が80年代風です。

No.2 1986年10月発行  
公共下水道事業に関する特集のサブタイトルは「まずは普及率40%を」。都市基盤の整備に力を注いでいた様子がわかります。



No.3 1987年3月発行  
特集は「街の動脈・交通事情」。小島貞二さん（演芸評論家）、宋左近さん（詩人）など、名だたる方がお気に入りの散歩道を紹介する企画も。



No.4 1987年7月発行  
8月の市川市動植物園オープンを目前に控えての特集は「動物たちが街にやってきた」。表紙には、大人気のレッサーパンダの写真も。



No.5 1987年12月発行  
特集はアメリカ・ガーデナ市との姉妹都市提携25周年を記念した「市川国際交流物語」。高橋國雄前市長がはっぴ姿で表紙に登場。



No.6 1988年9月発行  
目玉はミス市川と日本を代表するソプラノ歌手鮫島有美子さんの対談。表紙が淡いタッチのイラストになり、ぐっとシンプルな印象に。



No.7 1989年1月発行  
連載企画「子どもの目」は「いまどきの子ども2001年を予想する編」。当時、21世紀を迎える2001年は、夢見る未来だったのです。



特別号 1989年11月発行  
空撮写真を大きく載せた表紙は、市制施行55周年の特別号。「目で、歩く。市川の写真」と題し、市川のまちを写真で綴っています。



No.8 1990年3月発行  
'89年には、自然博物館や塩浜体育館の開館、インドネシア・メダン市との姉妹都市締結などの話題が相次ぎ、誌面で紹介しています。



No.9 1990年7月発行  
特集は海辺の自然を取り上げた「潮風のいざない」。コラムには消防艇「ちどり」の就航など、海に関するトピックが際だつ一冊。



No.15 1993年8月発行  
'92年に日本人初の宇宙飛行士となった毛利衛さんの大特集。'93年には市川の子どもたちに、宇宙や未来への夢を語る講演を開催。



No.14 1993年5月発行  
江戸つまみ簪、和船、染物型紙、染物道具など、市川の職人さんの特集。今に生きる手仕事のよさと心意気を伝えています。



No.13 1992年7月発行  
淡いブルーの上に浮かぶ可憐な花は、市川の名産品である梨の花。連載「シリーズ市川十選」のテーマは春。誌面から季節感が漂います。



No.12 1992年3月発行  
北原白秋、幸田露伴、永井荷風ら市川ゆかりの文人の特集。表紙は永井荷風が好んだことで知られる、大黒屋のかつ井です。



No.11 1991年10月発行  
表紙の丸い物体は、市民納涼花火大会の打ち上げ花火。特集は「駅と鉄道」。市内に7つの路線が走る市川の鉄道発展の歩みを追っています。



No.10 1991年3月発行  
特集は「もっと知りたい市川のこと」。表紙からコラム企画がはじまる情報満載型の巻頭で、見た目の印象に大きな変化が。



No.20 1996年7月発行  
特集は「江戸名所図会を歩く」。江戸名所図会に取り上げられた市川の地を訪ねて、現代の風景の中に往事の面影を探しています。



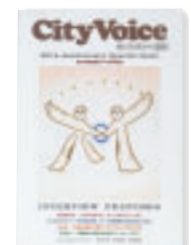
No.19 1996年1月発行  
防災特集を組んだ19号。'95年1月に起きた阪神・淡路大震災を機に、日本中が防災対策の大切さを改めて認識した時期でした。



No.18 1995年8月発行  
タイトルロゴがすっきりとした印象に。特集のテーマは戦後50年。タイトル貼りのたばこ屋の店先を写したモノクロ写真が面白い味です。



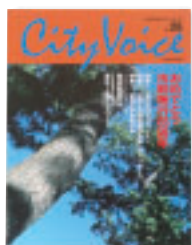
No.17 1995年3月発行  
'94年にオープンしたメディアパーク市川を特集。表紙の「光のオブジェ地生-35°43'PORARISへ」は、'95年国際照明デザイン賞を受賞しました。



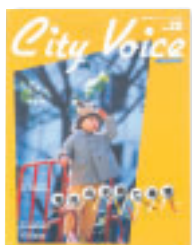
特別号 1994年11月発行  
手をつなぐ人が「六十」の文字を描く市制施行60周年特別号。サエキけんぞうさん、ちはるさんら著名人のインタビューが満載です。



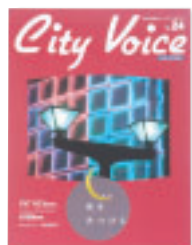
No.16 1993年10月発行  
特集は「市川の新・施設ガイド」。この時期、観賞植物園、クリーンセンターをはじめとする公共施設が続々とオープンします。



No.26 1999年10月発行  
市制施行65周年を記念して世相の変化を追ったり、開校したのの妙典小児童が登場するなど、市川の過去と未来にスポットを当てています。



No.25 1999年3月発行  
少子化が一層進む中、4月からスタートするエンゼルプランを目前に控えて「いちかわの子育て事情」を特集しています。



No.24 1998年10月発行  
表紙のデザインを一新した24号。特集は、夜の市川が見せるさまざまな顔を一人の写真家が追ったルポルタージュ「夜をみつける」。



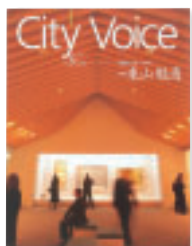
No.23 1998年2月発行  
たくさんの靴が並ぶ表紙は、地域ぐるみの教育を考える特集企画から。巻頭には、市民と共に元旦マラソンに参加する千葉光行市長が登場。



No.22 1997年9月発行  
翌年の保健医療福祉センターオープンに先駆けて高齢社会の福祉を特集。表紙のマンドリルは、動物園の10周年を記念したものの。



No.21 1997年3月発行  
約2万年前から人が住み続けてきたといわれる市川の大地。市内各所に残る貝塚や遺跡など、原始古代の文化遺産を知る特集企画です。



No.31 2006年2月発行  
国際的な日本画家として知られ、名誉市民でもある東山魁夷氏の生涯と功績を特集。前年11月には東山魁夷記念館が開館しました。



特別号 2004年11月発行  
市制施行70周年の特別号は、誰もが願う「健康」について。この年11月に行われた70周年式典で市川市は、WHO健康都市宣言をしました。



No.30 2003年11月発行  
市川に生まれ、アラスカの雄大な自然を撮り続けた写真家・星野道夫さんの特集。この年、12月から文化会館で「星野道夫写真展」を開催。



No.29 2003年2月発行  
特集は「いちかわで踊ろう」。2002年に行われた市民ミュージカルの様子と共に、さまざまなジャンルのダンスに親しむ市民を紹介。



No.28 2001年9月発行  
ベチユニアの花が華やかな表紙の28号では、身近な自然を守り育てる市民の活動を紹介しています。ロゴの変化にもご注目。



No.27 2000年9月発行  
ホルンを大胆に配した表紙の27号は、「音楽のまち」としての市川を特集。この号から、発行が年2回から1回になりました。



新たに「郭沫若記念公園」となった看板の除幕をする千葉光行市長。

## 中国・樂山市との友好都市締結25周年 真間5丁目公園を 郭沫若記念公園に改称

市川市と中国四川省にある樂山市が友好都市となったのは、1981年10月21日のこと。樂山市出身の政治家・文学者である郭沫若氏が1928年から1937年にかけて市川市に住んでいたゆかりから、1978年の日中友好条約締結を機に交流への気運が高まり、友好都市締結に至りました。

それから25年、市民団や青少年の相互派遣などを通じて市川市と樂山市の市民は友情を深めてきました。2004年には、郭沫若氏の旧宅を真間五丁目公園に移築・復元し、郭沫若記念館として整備。そして、2006年には25周年を記念し、真間5丁目公園を郭沫若記念公園に改称しました。10月21日には、抜けるような秋空のもと、新公園名を披露する式典や郭沫若氏に関する講演会、樂山市を紹介する展示や試食等のイベントを開催し、多くの市民でにぎわいました。

郭沫若氏が市川市に残した友情の種は、25年の歳月を経てたくさんの市民の心に根付き、これからもさらに大きく育っていくことでしょう。



中国・四川省のほぼ中央に位置し、岷江・青衣江・大渡河の3つの川の合流点にある樂山市は、成都・重慶など主要都市につながる要衝として栄えています。1996年には、世界最大の石仏である樂山大仏と峨眉山が世界遺産に指定されました。



試食コーナーの麻婆豆腐は、本場四川風。たっぷりの山椒が利いたシビれる旨さに舌鼓。



郭沫若記念館の展示室には、愛用の毛筆や硯、結婚衣装のレプリカなど、25周年を機に樂山市から届いた品々が加わり、さらに充実しました。



中国茶コーナーではジャスミン茶とバラ茶が振る舞われました。



## 高校生ボランティアによる壁画が完成 こども発達センター正面玄関



水性ペンキの色調整は微妙な加減が必要。一つの色を作るのに時には20分近くかかることも。



原画は田中里奈さんの作品で、コンセプトは「絵の中に物語がある絵」。巨大な草花や生き物など、低い視線から見る別世界を表現しています。



この日はペンキの調合班と色を塗る草班、空班、花班に分かれての作業。「これだけ大きな絵を描くのは初めて。大変だけどやりがいがあります」

2006年7月、こども発達センター正面玄関が色鮮やかな壁画で飾られました。絵を描いたのは、市川工業高校インテリア科に通う高校生ボランティアたち。「行政の建物の堅いイメージを払拭して、来た人の心が明るくなるような玄関に」という市の協力依頼を受けて、12人の3年生が名乗りを上げてくれました。

「この話を生徒に持ちかけたところ『やってみよう！』と、即答が返ってきました。インテリアデザインを学ぶ彼女らにとって、ニーズに合わせた空間づくりをする今回の壁画制作は、またとない実践のチャンスにもなっています」と、同校の金子裕行先生。

それからは、施設の下見、一人1作品以上の原画提出、投票による原画の絞り込み、こども発達センターへのプレゼンテーション、構図の決定などの工程を5月の間にすべて完了し、6月から7月にかけてほぼ毎週、壁画を描く作業にかかりました。そんな高校生たちの熱意が伝わるのでしょうか、

通りがかかる人が「面白い絵だね」「出来上がりはいつ？」などと声をかけていきます。

地域のひととつながりの中で生まれた壁画は、愛らしい絵の世界がもたらす温かみ以上のものを、見る人の心に伝えてくれるに違いありません。

生前、愛鳥のインコを肩につくつぐ宗左近さん



## 詩人・宗左近さんを悼む

日本詩壇を代表する詩人であり、美術評論や縄文土器の収集家としても知られる宗左近さんが、2006年6月20日逝去されました（享年87）。

宗さんは、1978年から市川南に住み、眼下に江戸川を望む部屋から数々の作品を発表。また、市川縄文塾・夜の虹賞を創設・主宰し、市川市民文化賞の選考委員を務めるなど、地域文化の創造にも尽力されてきました。生前、宗さんは「市川には東京にない匂いを感じる。それは、単に自然豊かで空気がよいのではなく、はるか縄文から人の営みが続く大地の記憶がもたらす匂いなのだ」とおっしゃっていました。市川の風土を愛し、文化を育てた宗さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。

故人の作詞による「市川讃歌」の直筆原稿（文学プラザ蔵）

